Ｆｏｒ　Ｓｅｖｅｎ　Ｄａｙｓ　ＦＲＯＭ　３．１１

～ Beyond the moment～

野口 雄司

3 月末、表題の冊子（85㌻）が送られてきました。

2011 年 3 月 11 日東日本大震災から 11 年。福島県浪江町の知人から送られてきた冊子の題名です。毎年あの時の記憶が甦るも、その時、人々がどのように行動したかは、映像を通してのものでしか知る事ができません。一方でその記憶も風化していくという状況もあります。

知人家族は原発の事故により、現在、浪江町から郡山に引っ越しせざるをえず、借り上げの居を構えておりますが、当時は線量計やわずかばかりの生活物資を送ったことを、今でも記憶に深く刻まれております。

当時、浪江町は東京電力福島第一原子力発電所が次々と爆発していき、3 月 15 日に 3 号機爆発が起きました。例年であればこの時期の風は海に向かって吹くのですが、不幸にもこの日の風は内陸に向かって吹き、放射能を含んだ雲が福島県の北西にかかっており、雪も浪江町をおおい、多くの家屋や木々が汚染されてしまい、それが長きにわたって福島を苦しめることとなったのです。

今回の冊子の発行元は、2005 年浪江町役場主催の「簡単な英会話教室」に参加した方々による自主サークルＮＥＳＳ（Namie English Speaking Society）によるものです。

震災から 11 年。震災当事者として英文と和文で当時の記録を残そうと出版活動に取り組んだ成果物ということです。この冊子が浪江町に住む外国人をはじめ、国内外の人を対象に、町の歴史の英文記録及び震災時における異文化理解の一助になればとのことです。

それぞれの地震直後の 7 日間の行動を記した内容が綴られております。ここでは知人の 7 日間の記録の一部を紹介させていただきます。

（原文より一部省略・編集。以下なるべく原文に忠実に記載）

【3 月 11 日】

私は食品企業視点の品質管理部で働いていました。午後 2 時 46 分、大きい地震が起きたとき、いつも通り棚にある食品のチェックをしていました。棚にあるたくさんの品物が次から次へと床に滑り落ちました。何人かのお客様を建物内の安全な場所に誘導しましたが、地震の揺れはますます大きくなり、建物が崩壊するのではないかと怖くなり、結局お客様、従業員と私は急いで外に出ました。

その後、浪江の自宅に向かいましたが、国道 6 号線は通行止めになっており、迂回を余儀なくされました。帰宅途中にも余震があり 30 分程度の道のりも 2 時間かかりました。

自宅の中は足の踏み場もなく、全てのものが散乱している状況でした。停電で余震もあり屋外にストーブを出し冷凍の餅を焼いて食べ、その夜はほとんど寝ることができませんでした。

【3 月 12 日】

浪江町役場から原発事故の為、町民全員が津島方面に避難するようにアナウンスがありましたが、すぐ戻れると思い、毛布を数枚持って避難しました。

国道 114 号は車で非常に混んでいて、私たちが津島中学校についたときには、もうすべての教室、廊下は町民であふれていました。大変混んでいたので私たちは車中泊を余儀なくされました。その夜はとても寒く夫は車のヒーターをつけて暖を取りました。不運にも次の朝、車のバッテリーが切れてしまいました。そこで職員の方がバッテリーに充電してくれて私たちを助けてくれました。余震も続いており誰もが眠れなかった夜を過ごし、明け方防災無線で直ちに１２キロ圏外に出るようにとの避難指示が出ました。隣町の原子力発電所で何かがあったようです。

【3 月 13 日】

外に出ると、防護服に防護マスクを着ている人たちがおり、津島のお店で、布マスクや可燃ごみ袋を買い求め、可燃ごみ袋に毛布を入れ、車の中でそれに包まれ寝るための準備をしました。

DoCoMo の携帯は地震の影響で使用できず、公衆電話もコインがいっぱいで使用できない状況でした。

避難所は浪江市街地より寒さが厳しく、外は氷点下。避難所の体育館の床は底冷えが厳しく横になっても座っても寒さで身が縮む思いでした

【3 月 14 日】

家族との連絡もままならず、津島の峠まで歩き、とある人から AU の携帯を借り、仙台に住む息子とようやく連絡がとれ、安心しました。こちらの状況を説明するも、息子の住んでいる地区は停電で地震と原発事故の情報が入らなかった様子でした。

【3 月 15 日】

14.日に水素爆発があり、避難先の津島から離れて二本松市役所に向かうように浪江町役場からアナウンスがありました。そこで二本松のある体育館に避難しましたが、ＴＶやストーブはありましたが、体育館の床は冷たく、天井の照明が頭上にあり、余震により落ちるかもしれないと、全く眠ることができませんでした。

【3 月 16 日】

近所の住民たちが布団を次から次へと提供してくれて、大変うれしかったのを覚えています。

介護の必要な家族もいました。体育館で寝たきりの人のお世話は、スクリーンや間仕切りが無く、プライバシーが守られない厳しい状況でした。多くの住民はテレビで原発の消火作業を歯がゆい思いで見ていました。

そのころ、親戚の住んでいる地区が家・車・木・小さな建物など、津波に流され全滅したと聞き、大きなショ

ックを受けました。

【3 月 17 日】

体育館での避難生活を続けていたら心身ともに病気になると考え、息子の住んでいる仙台に向かうことにしました。

私たちは二本松の市の大平体育館を昼前に出発しました。車のガソリンが残り少ないので仙台に行けるかどうか不安でした。途中のガソリンスタンドで 20 リットルの給油ができましたが、その後は全てのガソリンスタンドで緊急車両優先のため給油を断られました。

雪のちらつく中、ようやく夜遅く仙台につきました。すぐにシャワーを浴び、温かい食事をしたのは一週間ぶりでした。ようやく緊張から解放された気持ちでした。

その後

私たち 5 人は息子のアパートの一部屋で 4 月 20 日まで生活をしました。浪江町役場は二本松市で業務を再開しました。私たちは二本松の仮設住宅を希望しましたが、既にいっぱいでした。21 日からは本宮市の雇用促進住宅で避難生活をしました。その建物は 30 年以上前に建てられて取り壊す予定でした。シャワーも温水器もありませんでしたが、それでもそこに住むことができて幸運でした。

一方で義母はだんだんと元気が無くなりました。彼女はもっと良い場所を希望しており、そこで私たちは郡山に借り上げ社宅として家を借り、9 月に引っ越しをしました。2020 年 2 月、古い家の解体を終え、その場所に新たな家を建てました。現在、夫と義母は週末に浪江の家に行き、畑づくりをしております。私は複雑な気持ちです。例えば放射線問題にいくつかの心配がまだあります。なぜなら家の周りがまだ放射線量が高いからということもその一つです。

紹介した内容（抜粋）はあくまでも一家族の 3 月 11 日から一週間の出来事の概要とその後の状況です。

冊子には様々な人々が突然の災害に直面し、それぞれの置かれた状況の中で困惑し、どのように対峙したか、7 日間の行動や感じたことが記録されておりました。

この家族の記録以外にも印象に残った記述の一部を紹介します。

・発電所は重大な事故は起こらないといわれていた。これは一時的な避難であって、すぐに帰れると思った。
・自宅に戻る時、役場職員から「屋内避難命令が出されている」といわれました。その時はなぜ屋内避難なのかと思ったが、その理由は数日後にわかりました。既にその時点で発電所のトラブルがあり、放射性物質が発電所から漏れ出していたのです。
・避難途中の道路にたっていた避難誘導の人々は、皆宇宙服のような放射能防御服と防毒マスクに身を包んでいて、昔見た SF 映画のようでした。反対車線を行き交うのは、迷彩柄の自衛隊の装甲車。自分の置かれている状況が信じられず、現実感を失いました。
・あちらこちらから聞こえるサイレンの音・・・その中をスローモーションのように私の車が走り抜けていきました。
・ある避難所では、仮設トイレが 2 つしかなく、男女の区別なく、朝から順番を待つ列ができます。
・水道の水が出ないので、給水ポリタンクから手で水をすくって飲みました。
・授乳中の若いお母さんは隠れる場所も無く、人前で後ろを向きながら母乳をあげていました。
・食べるものも満足ではなく、「しかたない・」がみんなの口からこぼれます。
・多くの人々が一旦分かれる際「元気でね・・」「きっとどこかで会いましょうね・・」「生きていこうね・・」という言葉に人生の一ページの言葉としては重すぎるものを感じました。
・「故郷には戻れなくなるのでは・・・？」との不安におしつぶされそうな気持で一日一日を過ごしました。帰郷の難しさを悟りはじめましたが、子供たちが無邪気に「いつ頃、浪江に帰れるの？」と聞かれるたび、返答に困る毎日でした。

共通して、朝からテレビでは被害情報がどんどん流れている状況を、現実のものと受け止めることができず、限られた資材を有効に活用しながら、極限ともいえる環境の中で必死に生きるための努力をしていたことが判読できました。

また多くの方の記述の中で、最後に多くの感謝の言葉が綴られていたことも胸を熱くするものでした。

将来の事を考えると不安でしたが、多くの方による善意や言葉がすごい励みになったとのこと。そうした一つ一つに感謝しても足りないと思い、その気持ちが浪江町の復興のお手伝いに少しでもできればと、新たな一歩を踏み出しているということです。

何もない身軽さと何もない怖さ。人にとっての「もの」とは何なのか。大事な「もの」とは何なのか。それほどの価値もないものだけれど、当時の私の命を助けてくれた「もの」を再確認するということを経験したのです。

ある方は、この被災で「一期一会」と「人間万事塞翁が馬」という二つの格言を学んだそうです。

最初の格言は出会いの素晴らしさを教えています。人々の出会いに感謝することの大切さです。避難している中、出会った人々の温かい心に触れあうことが出来たそうです。

2 番目の格言はどんな苦境にあっても決して絶望してはいけない。そしてやがて夜明けが微笑んでくれる日がきっと来るということです。

今回の原発事故・自然災害について、震災で失われた「いのち」や故郷のへの「鎮魂」の思いと未来への「希望」のためにも、様々な視点で 11 年間の振り返りを行うべきでしょう。風化させないためにも・・・・・

了